



No.34 Sep.2009

NABUNKEN NEWS

Sep.2009



独立行政法人 国立文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町四丁目9-1
<http://www.nabunken.jp/>

■ ガイダンスコーナーの開設

8月3日、奈良文化財研究所（以下「研究所」という）の研究成果の公開を積極的に推進するため、玄関脇の小さなスペースにガイダンスコーナーを開設しました。これは、平城宮跡資料館がリニューアル工事等により休館中であるため、その代替となる場を設ける必要が生じたことから、急きょ設置することとしたのですが、本来、研究所の運営において必要な場であり、研究所施設内にあるべきものと考えています。

このガイダンスコーナーは、展示面積が少なく必ずしも十分な展示はできませんが、研究所の調査研究の内容を迅速かつ的確に伝えるものであるように企画されており、現状では、①平城宮調査の今、②国際共同研究・文化遺産保存修復、③情報コーナーの3つから構成されています。

「平城宮調査の今」は、平城宮第一次大極殿院内庭部の調査（平城宮第454次）に関するパネル展示そして回廊と東棟で使われた瓦の展示で構成されています。

「国際共同研究・文化遺産保存修復」はカンボジア・アンコール遺跡群の共同研究に関するパネル展示やビデオ上映などで構成されています。

「情報コーナー」では、平城宮跡資料館に設置されていたコンピュータを移設し、「デジタル平城京探索」や研究所のホームページにも簡単にアクセスしていただけるようになっています。

平城宮跡内の各施設においてボランティアのみなさんがガイダンスルームを積極的に広報してくださいましたおかげで、8月は予想以上に多くの方々に研究所を訪れていただくことができました。特にお盆の頃には親子連れで訪れる方が多く、かつて殺風景と言われた序舎玄関も大変にぎわっていました。

今後、研究所がさらなる発展を遂げていくためには、ボランティアのみなさん、地域の方々や子どもたちにも、研究所のファンになっていただくことが不可欠です。そのための様々な工夫を、これからも日々実行していきたいと思っています。

ガイダンスコーナー開設にあたり、ご尽力いただいたすべての皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。（管理部 多昭彦）



本庁舎ガイダンスコーナー

発掘調査の概要

甘樺丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第157次）

甘樺丘は、飛鳥川の西岸にある標高145mほどの丘陵で、『日本書紀』には、皇極天皇3年（644）、この丘に蘇我蝦夷・入鹿親子が家を建てたことが記されています。遺跡は、丘の東南麓にある支谷のひとつに位置し、公園整備を契機として2005年度から継続的な調査を実施しています。2006年度の調査では、遺跡の中央にあった谷の東岸に築かれた7世紀前半の石垣を約15mにわたって検出し、この場所が7世紀の前半から末にかけて大規模な造成を繰り返しながら継続的に利用されていた様子が明らかになりました。今回の調査は、石垣がどのように続していくのかを確認することと、遺跡東辺部の状況を明らかにすることを主な目的としています。

調査の結果、石垣についてはその南端を確認し、2006年度の調査と合わせて全長約34mにわたるものであることが明らかになりました。さらにこの石垣は、全体が一連のものではなく北から23mのところで東に曲がっていたものを、南側にさらに土盛をおこない10m分の石垣を新たに加えていることがわかりました。この石垣は、7世紀の中頃には谷とともに大規模な造成によって埋め立てられており、この場所はその後平坦地として利用されます。

今回の調査ではこのほかにも、石組の溝をめぐらせた石敷きや、50点をこえる土師器・須恵器が出土した大型の土坑、須恵器の壺に蓋をかぶせて埋めた埋設構造、石組溝、建物跡など時期の異なる多様な遺構を確認し、複雑な土地利用の様子を知ることとなりました。

（都城発掘調査部 次山 淳）



石垣の検出状況(北西から)

高松塚古墳の発掘調査（飛鳥藤原第154次）

国宝壁画の保存修理のために、2006～2007年度に石室の解体事業が実施された高松塚古墳では、壁画の修理が完了するまでの間、築造当初の形状に古墳が仮整備されます。そのための情報収集を目的とした発掘調査を昨年7月以来、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会と共に進めてきました。1975年に建設された保存施設の撤去工事の期間をはさみながら、本年6月まで古墳南側を中心に調査を実施しました。

その結果、古墳南東側で墳丘を取り巻く浅い周溝を検出し、高松塚古墳が直径23mの円墳であることが追認できました。さらに古墳南端では、墳丘内から南へ直線的に延びる暗渠を2本検出しました。2本の暗渠は、古墳の中軸線をはさんで東西4mの対称の位置にあり、石室周囲の排水を目的に、墳丘を築く直前に計画的に配置されたものと考えられます。また、従来から高松塚古墳の南側には、古墳築造以前に小規模な谷が存在したことが推測されてきましたが、今回の調査では、深さ2.7mほどの谷を一気に埋め立て造成した後に墳丘を築いていることが判明しました。高松塚古墳の墳丘復元に必要となるデータが得られるとともに、古墳が当初から緻密な計画性に基づいて築造されていった様子が明らかになりました。

今回の調査をもって、国宝壁画恒久保存対策事業の一環として進めてきた高松塚古墳の発掘調査はすべて完了しました。現地では、これまでの発掘調査の成果に基づいて、墳丘の復元工事が急ピッチで進行しています。間もなく、仮整備によりリニューアルした高松塚古墳をご覧いただけることでしょう。

（都城発掘調査部 廣瀬 覚）



発掘調査中の高松塚古墳(南東から)

平城宮第一次大極殿院の調査（平城第454次）

大極殿院は、天皇の即位や元日の朝賀、外国使節の謁見などをおこなった場所で、古代都域の中で最も重要な空間です。平城宮の大極殿院は、奈良時代はじめに平城宮の中央北側に造られ、奈良時代後半になると、東の区画に移ります。この2つの大極殿院をそれぞれ第一次大極殿院、第二次大極殿院と呼んでいます。

奈良文化財研究所では、第一次大極殿院の発掘調査を1959年の第2次調査から継続しておこなってきました。これまで、区画の東半分と回廊部分の発掘調査を終え、遺構の全貌がほぼ解明されています。まず、区画の周囲は築地回廊で囲まれ、回廊の内部は北側3分の1が高くなっています。壇上に大極殿と後殿が南北に並びます。壇の南側は一面に磔が敷かれ、広場となっていました。区画全体の大きさは南北318m、東西178mにも及ります。

今回の調査は、第一次大極殿院東半分のうち未発掘だった区画南東隅部分で、東面回廊と南面回廊に囲まれた区画内部の広場にあたります。調査面積は1556m²で、4月13日より開始し、7月15日に終了しました。

調査では、当初の予想通りに広場の磔敷が確認されました。この磔敷は全部で3層あり、それぞれ①平城宮造営当初、②南面回廊に樓閣を増築する時期、③恭仁京から還都後に敷かれたもので、古いものか



第454次調査区全景(南東から)

ら下層磔敷、中層磔敷、上層磔敷とします。これら3層の磔敷はそれぞれ磔の大きさが異なり、もっとも古い下層磔敷では径5cm程度、中層磔敷は径5~15cm、上層磔敷は径1~3cmでした。

さらにこの磔敷を掘り込む幅2m程の東西溝が検出されました。この溝は2時期あり、古い方は中層磔敷に、新しい方は上層磔敷にともなうもので、西から東に流れ、東面回廊の雨落溝に合流します。そして回廊の隅部分の基壇の下の暗渠を通って区画の外側に流されます。

この東西溝と磔敷の標高を比べると、興味深いことが分かりました。平城宮造営当初の下層磔敷の段階では、地面は北から南まで緩やかに傾斜しています。ところが中層磔敷を敷く段階で、南面回廊より約25mの範囲で下層磔敷の上に盛土をし、地面の傾斜を北側が低くなるように変えていました。この低くなった谷の部分に先ほどの東西溝を通していったのです。つまり、平城宮造営段階では雨水などの排水は、北から南面回廊北側の雨落溝まで流していたものを、南面回廊に樓閣を増築した時には、樓閣の北側に東西溝を通して、その溝に排水していたと考えられるのです。

その理由は2つ考えられます。ひとつは、南面回廊に樓閣を増築したことで、南面回廊の北雨落溝が機能しなくなつたため。もうひとつは、広大な大極殿院の排水の処理を改善するためと考えられます。

去る6月20日には現地説明会をおこない、755名の方々にお越しいただきました。現在復原工事中の大極殿正殿も覆屋の撤去が始まり、その姿が徐々に見えて来ました。今後は、いよいよ来年の平城遷都1300年祭に向けての整備が始まります。

(都城発掘調査部 大林 潤)



東西溝(西から)

発掘調査ジオラマと遺構の記録

平城宮跡資料館は、来年の平城遷都1300年記念事業に向けて現在リニューアル工事をおこなっています。今回は、平城宮跡資料館に展示されている資料のうち「発掘調査ジオラマ」を紹介します。

このジオラマは、平城宮内裏東側を流れる基幹排水路SD2700とその周辺の遺構を発掘している様子を示したもので、1987年の資料館リニューアル時に作成されました。平城宮の廃絶から発掘を経て遺跡として整備されるまでを、6場面で説明しています。そのうちの4場面は発掘調査の過程を春（発掘直前）、夏（発掘のはじめの頃）、秋（発掘のおわりの頃）、冬（正確な図面の作成）として、季節の移り変わりとともに示しています。

この精巧なジオラマが作られてから約20年、発掘調査の基本的な作業はほとんど変わっていませんが、測量技術は道具や機械の進歩とともに変化してきました。かつては、道方を組み水糸を張っておこなっていた実測は、衛星との交信で座標を求めるGPS測量と、水準器から直接標高を読み取る方法へ移行しました。遺構の記録の基準となる木製の地区杭も、金属製の長いピンに変わりました。

今回の資料館リニューアル後も、引き続きこのジオラマを展示する予定です。都の解体から復原整備までの流れ、調査員・作業員の奮闘ぶりもぜひご覧ください。

（都城発掘調査部 大林 潤）



遺構記録（実測）作業のひとこま
道方から水平基準の水糸を引く

春 発掘直前の平城宮



平城宮が廃絶してから1200年。既に水田と化した平城宮の発掘が始まります。調査前には探査で遺跡の状況を調べます。

夏 発掘のはじめの頃



発掘調査が始まり、徐々に遺構が検出されています。ベルトコンベアを使用して土を調査区外に運び出し、遺物はコンテナにとりだします。





こま

張り巡らせたり、現在は使われていない地区杭なども見られます。



遺構面の標高を記録する作業

水糸から遺構までの高さを測定し、遺構面の標高を記録します。



秋 発掘のおわりの頃

いよいよ発掘も佳境。基幹排水路の掘り下げが進みます。検出が終わった部分は写真を撮って記録をします。



冬 正確な図面の作成

発掘が終り、検出した遺構を記録します。記録の基準となる水糸を張るために測量をして遠方を組みます。



■ 東京大学史料編纂所とのデータベースの連携

2005年2月に公開した木簡画像データベース「木簡字典」（<http://jiten.nabunken.go.jp>）は幸い多くの利用者を得ています。このたび、東京大学史料編纂所が公開しているくずし字のデータベース「電子くずし字字典」との連携を図ることになり、去る5月29日（金）、東京大学福武ホールにおいて、奈文研の田辺征夫所長と東京大学史料編纂所の加藤友康所長との間で連携に関する覚書を締結しました。

「木簡字典」は古代の出土文字資料の代表選手である木簡の文字、一方「電子くずし字字典データベース」は中世・近世の紙の文書のデータを中心とする文字の字典です。今回の連携は、共通の検索システムを設けて、両データベースの検索結果を同時に表示できるようにするものです。このシステムが実現すれば、古代から近世まで千年にわたる日本の文字の変遷を一覧できることになり、既に定評のある両データベースの利便性がさらに大きく向上します。現在、今秋の公開に向けて準備を進めていますので、是非新しい日本の文字の世界を訪ねてみてください。

奈文研と史料編纂所とは、薬師寺の古文書調査を共同でおこなってきた実績があります。今回のデータベースの連携は、考古学と日本史の研究拠点相互の連携として画期的なものです。こうした研究工具は、機関の財産であると同時に、国民の財産でもあり、それらの連携は研究機関に課せられた責務でもあります。今回の連携はその先駆的な事例として重要な歴史の1頁を飾ることになるでしょう。

（都城発掘調査部 渡辺 見宏）



握手を交わす加藤所長（左）と田辺所長（右）

■ 現代の名勝、平城宮東院庭園

2009年7月23日、現代に息づく保護すべき優れた名勝地として、文化財保護法第109条の規定に基づき、平城宮東院庭園が名勝に指定されました。

平城第44次発掘調査で東院地区の南端に園池の遺構が発見されてから40年余り、また、発掘調査の成果に基づき、さまざまな検討を重ねて復原修復して公開を始めてから10年余り、平城宮跡の国営公園化の取組みや遷都1300年の節目とも相まって、単に奈良時代の宮城の遺構を極めて良好に遺す遺跡としてのみならず、現代に生きる文化遺産としての保護を広く考えるひとつの契機とするべきところです。

文化庁が公表している資料によると、平城宮東院庭園は、中国および朝鮮半島から伝わったと考えられる造庭技法を吸収し、9世紀以降の日本庭園に見る独自のデザインへと変化を遂げようとする過渡的な状況を表すものです。また、8世紀における日本古来の庭園文化と大陸伝来の庭園文化が融合していく過程と、その後の発展の過程を知る上で造園史上、極めて高い価値を持つ事例です。さらには、その独特的のデザイン・構造・技法が細部にいたるまで見事に復原された庭園として芸術上・観賞上の価値は高い、と評価されています。

東院庭園の区域は、当然、特別史跡平城宮跡の指定地に含まれており、遺跡の内容や価値についてその情報提供がおこなわれてきましたが、この度、重ねて名勝平城宮東院庭園が指定されたことにより、さらに庭園としての積極的な活用を図って、現代における芸術上・観賞上の価値をもっと豊かに発揮させていくような工夫を重ねていく必要があります。

（文化遺産部 平澤 翔）



名勝平城宮東院庭園と宇奈多里の森（南東から）

遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、今年度も遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で、朝陽地区隋唐墓の副葬品を調査しました。ここ数年、秋に調査するのが恒例となっていましたが、今回は6月7日から14日までの8日間、調査とともに共同研究等に関する協議もおこなってきました。調査者は、所外の研究者も含めて計8名でした。

今回の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、隋唐墓^{しりょう}・家族墓^{かぞくぼく}・縦維^{じゆい}縹唐墓^{けうとうぼく}・勾龍墓^{くろうぼく}(唐墓)の副葬品です。土器・陶器類^{とうきるい}・陶俑^{とうぎや}などを中心に調査を進めました。

調査は、遺物の撮影、熟覧・調書作成、実測、3Dデジタイザによる計測・データ採取など、考古学的調査を実施しました。勾龍墓は1983年に発掘調査がおこなわれた唐墓で、出土した墓誌から唐の高宗咸亨3年(672)という年代が判明しています。この年は日本では天武元年にあたります。今回調査した三彩の「水孟」は、鉢形の灰皿のような器で、2008年3月にも調査していますが、今回改めて細部の観察をおこない製作技法などを確認しました。来年度、調査研究論集の作成に取りかかる予定ですが、そのためにも今後、こうした詳細な再調査が必要になるとを考えています。

今回はこうした副葬品調査とともに、調査研究論集の編集方針や今後の調査・研究の進め方について協議をおこないました。また飛鳥資料館における秋期特別展の図録作成のために、喰^く禿^{だら}洞墓や鴻^{こう}素^そ弗^ふ墓などの遺跡の現況を撮影してきました。秋には中国の研究者の招聘を、来年3月には調査を予定しています。

(企画調整部 小池伸彦)



馬素弗墓の遠景（中央やや左の擁壁部分）

解説ボランティアの10年

平城宮跡が世界文化遺産に登録された翌1999（平成10）年の10月に、奈良文化財研究所の解説ボランティア事業は開始されました。

当時、平城宮跡を訪れる人から解説を望む声が多く寄せられていたこと同時に、研究所としても調査の成果を広く発信したいという思いから、設置が実現したものです。

当初、ボランティアの人数は50名からのスタートを計画していましたが、募集してみると260名を越える応募があり、驚きながら抽選をおこない、89名の方々を一期生としてお迎えしたのでした。

あれから10年。その後、3回の募集を重ね、現在51歳から80歳まで128名のボランティアが平城宮跡の各施設を中心に活動しています。今では知識も経験もすっかり円熟され、みなさんそれぞれの個性あふれる解説は、平城宮跡を訪れる人たちにとって、なくてはならないものとなっています。

この10年間の活動に敬意を表して、この6月4日には青木文化庁長官（当時）から感謝状が贈呈されました。勤勉なボランティアのみなさんの熱意と、訪れる人々への思いやりに支えられて継続してきた事業を、研究所も大切に発展させていかなければなりません。

さて、11年目となる2010年は、ちょうど平城遷都1300年祭が開催される年に当たり、まさに大きな節目です。「定点ガイド」として参加する1300年祭「平城宮跡探訪ツアー事業」に備え、現在、研修をおこなっているところです。

ますます期待が高まり、忙しくなる解説活動ですが、健康にはくれぐれも注意していただいて、次の活動日も元気に平城宮跡へお越しくださることを願っています。

(管理部 永井あづ子)



青木長官からの感謝状贈呈式（平城宮跡資料館講堂）

飛鳥資料館のみどころ（17）

飛鳥資料館秋期特別展のご紹介

「北方騎馬民族のかがやき 三燕文化の考古新発見」

10月16日（金）～11月29日（日）

飛鳥資料館では、今年の秋に「北方騎馬民族のかがやき－三燕文化の考古新発見」と題しまして、特別展をおこないます。

中国北東部の遼寧省西部で、騎馬民族の鮮卑族のひとつ慕容鮮卑が、3世紀初頭から5世紀半ばにかけて活躍した時代がありました。彼らは燕と呼ばれる国を337年に建国し、436年に北魏に滅ぼされるまで続きました。この時代は、前燕（337～370）、後燕（384～409）、北燕（409～436）の3つの時代に区分され、これらを合わせて、三燕と呼びます。

これら三燕時代の遺跡の調査は、1960年代からおこなわれてきました。なかでも、90年代以降の調査では、喇嘛洞墓地など大規模な遺跡が発見され、三燕文化の重要性が認識されるようになりました。さらに、日本の古墳時代との関連を示す出土遺物が存在することから、研究者の関心を集めました。

こうした中、奈良文化財研究所は1996年以降、遼寧省文物考古研究所と共同研究をおこなってきました。

今回の特別展では、喇嘛洞墓地の出土品をはじ

めとした三燕文化の遺物を展示していますが、そのみどころのひとつは、三燕文化の特徴である見事な金製品や金銅製品です。なかでも、頭飾りの歩搖は、慕容氏の名前の由来ともされるもので、見る人を魅了します。また、騎馬民族であった鮮卑族の遺跡からは、馬具類も多く出土し、当時の騎馬民族の姿が目に浮かぶようです。このほか、三燕の影響を受けた、国内の関連遺物も展示しています。今回の特別展で、皆様に北方騎馬民族による三燕文化の輝きをお楽しみいただければと思います。

（飛鳥資料館 成田 聰）



展示品の一部（喇嘛洞 I M10墓出土品）

「世界都市長安城の風景－平城京の原型－」

今井 真樹 都城発掘調査部主任研究員

「平城京遷都の歴史的背景－日本古代都城の出現と変質－」

井上 和人 都城発掘調査部長

本庁舎ガイダンスコーナー 特別企画展

○展示「地下の正倉院展－二条大路木簡の世界－」
2009年10月20日（火）～11月29日（日）

飛鳥資料館 秋期特別展

○展示

上記「飛鳥資料館秋期特別展のご紹介」参照

○記念講演会 於：飛鳥資料館講堂

2009年10月17日（土）午後1時～3時30分

「北方騎馬民族のかがやき 三燕文化の考古新発見」

町田 章 元奈良文化財研究所長

田 立坤 遼寧省文物考古研究所長

ガイダンスコーナー開設のお知らせ

奈良文化財研究所玄関横に展示スペースを設置しました。

公開時間 午前9時30分～午後4時30分

（土日祝は休み）

記録

埋蔵文化財担当者研修

○文化財写真I（基礎）課程

2009年7月7日～23日 7名

○文化財写真II（応用）課程

2009年7月23日～8月6日 9名

○古代陶磁器調査課程

2009年9月1日～9月9日 9名

飛鳥資料館展示

○夏期企画展

「魅るクメール文明」－世界文化遺産

アンコール遺跡群－撮影：BAKU 齊藤

2009年8月1日（土）～30日（日）

平城宮跡歴史文化講座（第9回）

（NPO平城宮跡サポートネットワーク主催）

2009年9月19日（土）午後1時30分～

於：奈良県中小企業会館

「土地制度と税制について～国・地方の財政を支えたもの～」

館野 和己 奈良女子大学教授

お知らせ

公開講演会（第105回）於：なら100年会館大ホール

2009年11月28日（土）午後1時30分～

「これからの平城宮跡－遷都1300年を迎えて－」

田辺 征夫 所長

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2009年9月